

- 問1 15世紀後半に京都で始まった大規模な戦乱をきっかけに、室町幕府の権威が衰え、下の身分の者が実力で上の身分の者を倒して地位を奪うという社会的な風潮が広まりました。この風潮を漢字3文字で何といいますか。 (2020年 千葉県公立入試 類似)
1. 惣一揆 2. 徳政令 3. 下剋上 4. 執権政治
- 問2 戦国大名の朝倉氏が定めた分国法（領国内の法律）の中には、家臣は自分の領地に城を構えることを禁止し、大名の本拠地である一乗谷に集まって住むべきことや、各地の統治には代わりの役人を配置することなどが記されています。このように、戦国大名が家臣を強制的に呼び寄せ、あわせて商工業者を集めることで経済の活性化を図った、領国の政治・経済・文化の中心地を何と呼びますか。 (2023年 広島県公立入試 類似)
1. 宿場町 2. 城下町 3. 門前町 4. 港町
- 問3 室町時代の後半から戦国時代にかけて、各地で戦国大名が勢力を伸ばした背景として最も適切な説明はどれですか。 (2024年 秋田県公立入試 類似)
1. 幕府の権威が衰え、身分の低い者が実力で上の者をしのぐ「下剋上」という風潮が強まったため 2. 特定の家柄のみが政治を独占する「門閥政治」が行われ、それに反発した新興勢力が台頭したため 3. 朝廷の権威を重んじる「尊王攘夷」の考えが広まり、幕府を打倒する勢力が現れたため 4. 幕府が各地の有力な農民に領地を分け与え、新しい支配層として育成したため
- 問4 越前国の戦国大名である朝倉氏が、拠点である一乗谷を中心とした領国支配を強めるために実施した政策の説明として、最も適切なものはどれですか。 (2024年 滋賀県公立入試 類似)
1. 一乗谷を商業専用の都市とし、家臣が居住することを厳しく制限した。 2. 室町幕府の法令のみを遵守させ、独自の法による支配を一切行わなかった。 3. 家臣をそれぞれの所領に住ませ、各地に防御のための城を自由に築かせた。 4. 家臣を一乗谷に集住させ、領内に勝手に城を築くことを禁止した。
- 問5 戦国時代、石見銀山などの鉱山開発が各地で盛んに行われた背景として、戦国大名が銀を求めた主な目的について説明したものとして、最も適切なものはどれですか。 (2023年 岐阜県公立入試 類似)
1. 鉄砲や火薬などの軍需品を調達する資金や、家臣への恩賞とするため 2. キリスト教の布教活動を支えるための寄付金として活用するため 3. 農村での貨幣経済を禁止し、年貢をすべて銀で納めさせるため 4. 朝廷から高い官位を得るための献上物として独占するため
- 問6 戦国時代において、各地の戦国大名が自らの領国（分国）内の武士や民衆を統制し、領国内の秩序を維持するために独自に制定した法律を何といいますか。 (2024年 千葉県公立入試 類似)
1. 御成敗式目 2. 武家諸法度 3. 分国法 4. 公事方御定書
- 問7 日本の歴史において、守護・地頭の設置や御成敗式目の制定が行われた時代（鎌倉時代）の様子を説明した記述として、ふさわしくないものはどれですか。 (2018年 熊本県公立入試 類似)
1. 実力のある下の者が上の者を倒して地位を奪う、下剋上の風潮が広がった。 2. 北条氏が執権の職に就き、幕府の政治を動かした。 3. 元軍の侵攻に対し、九州の御家人たちが防戦にあたった。 4. 将軍と御家人が、土地を媒介とした御恩と奉公の主従関係を結んだ。
- 問8 戦国時代を象徴する「下剋上」という言葉の意味や背景として、最も適切な説明はどれですか。 (2018年 熊本県公立入試 類似)
1. 身分の低い者が実力によって上の立場の者を倒し、勢力を拡大させていったこと。 2. 朝廷が有力な武士に官位を与え、伝統的な身分秩序を維持しようとしたこと。 3. 幕府が守護の権限を強め、地方の国人や農民を厳しく統制しようとしたこと。 4. 農民が団結して自治組織を作り、守護による年貢の取り立てを拒否したこと。
- 問9 戦国時代、現在の島根県に位置する石見銀山は日本最大級の銀山として知られていました。この銀山の支配権をめぐる、中国地方を舞台に激しい抗争を繰り広げた戦国大名の組み合わせとして適切なものはどれですか。 (2026年 島根県公立入試 類似)
1. 織田氏と今川氏 2. 尼子氏と毛利氏 3. 武田氏と上杉氏 4. 島津氏と大友氏
- 問10 応仁の乱ののち、実力で領地を広げた戦国大名が、自らの領国内を統治し、家臣や民衆を支配するために独自に制定した法律を何といいますか。 (2023年 静岡県公立入試 類似)
1. 武家諸法度 2. 御成敗式目 3. 分国法 4. 建武式目
- 問11 戦国大名の一人である朝倉氏が定めた「朝倉敏景卿四十七ヶ条」という資料には、家臣が自らの居城以外に城を築くことを禁止する内容などが記されています。このような規定を設けることで、戦国大名が実現しようとしたこととして最も適切な説明を選びなさい。 (2026年 大阪府公立入試 類似)
1. 室町幕府の権威を背景に、近隣の守護大名との同盟を維持すること 2. 朝廷の許可を得ることで、他の大名に対して官位の優位性を示すこと 3. 家臣が独自の軍事力を持つことを抑え、大名による領国支配を強化すること 4. キリスト教の布教を制限することで、領民の思想的な結束を図ること
- 問12 越前国（現在の福井県）を支配した朝倉氏の法には、本拠地である朝倉館のほかに国内に城を構えることを禁じ、有力な家臣を一乗谷に移住させるよう命じた規定があります。戦国大名がこのような定めに代表される「分国法」を制定した主な目的として、最も適切な説明はどれですか。 (2021年 三重県公立入試 類似)
1. 家臣を城下町に集めて監視・統制を強め、反乱を防ぐとともに領国支配を安定させるため。 2. 一乗谷を商業の中心地とし、家臣に農業ではなく外国との貿易に専念させるため。 3. 幕府が定めた武家諸法度を遵守させ、将軍への忠誠心を高めるための準備を行うため。 4. 村々に代官を置くことで、農民から直接税を徴収する太閤検地の予備調査を行うため。
- 問13 16世紀のポルトガルによる日本への鉄砲伝来やキリスト教の布教は、当時のヨーロッパにおける宗教的情勢と深く関わっています。カトリック諸国がアジアへの進出を強めた背景について、正しい用語を組み合わせた説明を選びなさい。 (2021年 愛知県公立入試 類似)
1. 十字軍の遠征によってカトリックが衰退したため、新しく誕生したプロテスタントが海外貿易を主導した。 2. 宗教改革を弾圧したカトリック諸国が、プロテスタントと協力してアジアでのキリスト教布教を進めた。 3. 宗教改革によって誕生したプロテスタントに対抗し、カトリックが海外進出を通じて勢力拡大を図った。 4. ルネサンスの影響で誕生したプロテスタントが、カトリックを国外へ追放するために海外進出を支援した。

答え合わせ・解説

問1	答え 3 下剋上	応仁の乱によって幕府の統制力が弱まると、身分秩序が崩れ、実力主義の社会へと変化しました。「下の者が上の者をしのぐ」という意味のこの言葉は、室町時代後半から戦国時代を象徴するキーワードとなりました。
問2	答え 2 城下町	戦国大名は、それまで自分の領地に城を持っていた家臣たちを、大名の居住する本拠地に集まって住ませる「集住（しゅうじゅう）」を進めました。これにより家臣の反乱を防いで統制を強めるとともに、商工業者を呼び寄せて物資の流通を盛んにしました。福井県の一乗谷（朝倉氏）や、山梨県の甲府（武田氏）などがその代表的な例です。
問3	答え 1 幕府の権威が衰え、身分の低い者が実力で上の者をしのぐ「下剋上」という風潮が強まったため	14世紀から15世紀にかけての年表をたどると、幕府の統制力が弱まると同時に、各地で実力主義による勢力争いが激化していることがわかります。この「下剋上」の動きによって、従来の守護などの家柄に関係なく、軍勢力や政治力のある者が戦国大名として自立していきました。
問4	答え 4 家臣を一乗谷に集住させ、領内に勝手に城を築くことを禁止した。	朝倉氏は一乗谷に家臣を集めて住ませることで、家臣がそれぞれの領地で独立した勢力を持つことを防ぎ、主君による直接的な統制を強めようとしていました。また、家臣が勝手に城を築くことを禁じた点も、大名への権力集中を図る戦国大名特有の政策といえます。このような集住政策は、後の江戸時代の城下町の形成にもつながる先駆的な取り組みでした。
問5	答え 1 鉄砲や火薬などの軍需品を調達する資金や、家臣への恩賞とするため	戦国大名は、自国の軍勢力を強化するために多額の資金を必要としていました。特に種子島に伝来した鉄砲やその弾薬となる鉛、火薬の原料となる硝石を海外から購入するための支払い手段として、また功績のあった家臣への報酬として、銀は極めて重要な価値を持っていました。
問6	答え 3 分国法	室町幕府の権威が衰退した戦国時代、各地の大名は自らの実力で領国を治める必要がありました。そこで、家臣同士の私的な争いを禁じる「喧嘩両成敗」の規定や、年貢に関する取り決めなどを定めた独自の法を制定しました。江戸幕府が制定した「公事方御定書」とは時代背景が異なります。
問7	答え 1 実力のある下の者が上の者を倒して地位を奪う、下剋上の風潮が広がった。	鎌倉時代は将軍と御家人の主従関係や、御成敗式目による武士社会の秩序が重んじられた時代です。設問にある「下剋上」は、室町時代末期から戦国時代にかけて顕著になった社会風潮であり、鎌倉時代の特徴ではありません。この時期には応仁の乱などをきっかけに幕府の権威が衰え、実力主義の時代へと移行していきました。
問8	答え 1 身分の低い者が実力によって上の立場の者を倒し、勢力を拡大させていったこと。	下剋上は、室町時代末期から戦国時代にかけて全国的に見られた現象です。守護代が守護を追放したり、家臣が主君から実権を奪ったりするなど、家柄や伝統よりも個人の実力が重視されるようになりました。これにより、各地で戦国大名が台頭し、独自の領国支配を行うきっかけとなりました。
問9	答え 2 尼子氏と毛利氏	石見銀山は現在の島根県大田市に位置し、戦国時代にはその莫大な利益を求めて周辺勢力が激しく争いました。当初は出雲国（現在の島根県東部）を拠点とした尼子氏が支配を強めていましたが、安芸国（現在の広島県）から勢力を伸ばした毛利氏がこれに挑み、長期にわたる抗争の末に毛利氏が支配権を確立しました。山梨県の武田氏や鹿児島県の島津氏は、活動拠点が異なるためこの地の直接的な支配権争いには関わっていません。
問10	答え 3 分国法	室町時代の中期から後期にかけて、幕府の権威が衰え戦乱が全国に広がる中、各地に戦国大名が登場しました。彼らは土地の争いや家臣の統制、年貢の徴収などを円滑に行い、自分の領国を安定して支配するために独自の法律を定めました。鎌倉時代の「御成敗式目」や江戸時代の「武家諸法度」と混同しないよう注意が必要です。
問11	答え 3 家臣が独自の軍勢力を持つことを抑え、大名による領国支配を強化すること	戦国大名は分国法を通じて、家臣たちの勝手な行動を厳しく制限しました。朝倉氏の事例のように、居城以外の城（支城）を勝手に持たせないようにすることは、家臣が独立した勢力になることを防ぎ、大名の支配下に置くという目的がありました。このように、大名への忠誠を誓わせ、領国内の秩序を保つことが分国法の大きな目的です。
問12	答え 1 家臣を城下町に集めて監視・統制を強め、反乱を防ぐとともに領国支配を安定させるため。	戦国大名は、家臣が各地で独立した勢力を持つことを防ぐため、分国法によって城の建築を制限したり、家臣を自身の本拠地（城下町）へ強制的に住ませたりしました。これにより、大名は家臣を直接コントロール下に置き、軍勢力を集中させることで強固な領国支配を実現しようとしていました。
問13	答え 3 宗教改革によって誕生したプロテスタントに対抗し、カトリックが海外進出を通じて勢力拡大を図った。	当時のヨーロッパでは、宗教改革の進展によってキリスト教の世界がプロテスタントとカトリックに二分されていました。特にポルトガルやスペインなどのカトリック諸国にとって、海外進出は単なる商業的な利益だけでなく、プロテスタントに対抗してカトリックの教えを世界に広めるという重要な使命を持っていました。このため、大航海時代の進出は貿易とキリスト教の布教が一体となって進められました。